

# アフリカにおけるジェンダー／セクシュアリティ研究の潮流

田村 優

## Abstract

This review summarizes trends in gender and sexuality studies. Although the research on African women began in the 1930s, it was only in the 1980s and the 1990s that African scholars started raising their voices. African feminist scholars, at first, critically analyzed the notion of gender originated in the West; however, they gradually shifted their focus on their originality rather than building their identity by criticizing Western feminism. This tendency coincided with the concern about HIV/AIDS and International movements and in the 2000s, African feminists started to shift the focus from gender to sexuality. The sexuality studies expanded beyond feminism research and have illustrated a variety of pictures including the ones that highlighted the positive aspects of African sexuality such as pleasure, eroticism, and desire. Nonetheless, this paper suggests that sexuality studies also have limits, as pointed out in the time of early African feminism research, in terms of romanticizing women's position or gender complementarity in Africa. To overcome the limits, this paper discusses the possibility of recent studies on *love* and *affect*. Although the case study centering on *love* and *affect* in Africa is limited, the studies show the complex and multidimensional aspects of intimate relations and depict different emotions and body experiences that each relation holds.

キーワード……ジェンダー セクシュアリティ アフリカ 愛 情動

## 1 はじめに

「女」として生きるとはどういうことか。今まで考えたこともなかったことを博士論文執筆のためモザンビークに通い、アンゴラで仕事をするうちに考えさせられるようになった<sup>1)</sup>。そもそも最初にモザンビークの農村を訪れたのは農業と土地の調査のためであって、筆者の関心はジェンダー／セクシュアリティ研究とはかけ離れていた。しかし、フィールドの人たちは常に筆者を「女」として扱った。モザンビーク農村の友人は、割礼や初潮儀礼を受けていない筆者の行く末を案じ、農業の話よりもずっと熱心にそれらについて教えてくれた。また、アンゴラの都市部の友人は、30代未婚女性という共通項から筆者を同志として扱い、職場における女性ならではの悩みや結婚に向けた野望について話してくれた。

意図せずジェンダー／セクシュアリティというテーマが浮上する中、それらの先行研究を読み進めるうち、彩り豊かなモザンビークやアンゴラでの日常が、モノクロに置き換えられるような感覚を覚えた。これは、ジェンダー／セクシュアリティの先行研究の検討を通じて、アフ

リカ諸国が植民主義的視点をもって差別化、他者化されてきた歴史を持つことを痛感したためだと思う。

19世紀初頭に西洋の博覧会にて、幾度も見世物にされたのち、亡くなった後も遺体から性器などが切り取られ実験の対象となったコイサン女性のサーキ(サラ)・バートマン(Saartjie (Sarah) Baartman)の話は有名であるが、アフリカ諸国は独立後も後進性が強調され、他者化されてきた。それ故、非アフリカ社会からアフリカのジェンダー／セクシュアリティを扱うには細心の注意が必要とされるし、これまでアフリカ内外のフェミニズム研究を中心に多くの議論が積み重ねられてきたところでもある。こういった繊細さはよく分かるのだが、どこか、モザンビークやアンゴラでの日常を先行研究に依拠して描いていくことに納得がいかないのである。

そこで、本稿は1930年から今日までのアフリカのジェンダー／セクシュアリティ研究<sup>2)</sup>を振り返り、これまでの議論の潮流を明示した上で、どのように彩り豊かなモザンビークやアンゴラでの日常をそのままに記述できるかを考えてみたい。

## 2 欧米の女性研究者によるアフリカの女性<sup>3)</sup>に対する関心の高まり

ジェンダー／セクシュアリティという概念が使われる以前の1930年代、宗主国のイギリスを中心に女性人類学者によるアフリカの女性に関する記述が始まった。しかし、それらは、女王や王母などの権力を持つ女性に着目する研究や女性の労働負担と生産／消費活動における性別役割の研究などに限られていた [Cornwall 2005 : 2-3]。

1960年代から1970年代、アフリカの女性の経済に対する貢献に着目する研究をはじめとして、西洋の女性研究者の間で本格的にアフリカの女性への関心が高まっていく。たとえば、フランス出身の人類学者であるポルムは、アフリカの女性の労働負担の大きさを強調してきたそれまでの研究に対し、アフリカの女性の世帯への経済社会的貢献は不可欠なものであり、西洋のように夫の収入に依存する妻という立場から捉えることはできないことを主張した [Paulme (ed) 2011 (1963)]。

この議論は、元々農耕で中心的な役割を担っていたアフリカやアジアの女性が、植民地化と近代化を通じて農耕から疎外されてきたことを示したデンマーク人の農業経済学者であるボズラップ [Boserup 2011 (1970)] により一層精緻化されることとなった。ボズラップの研究は、「国連婦人の10年」(1976年から1986年)において、食料生産の担い手として女性を開発援助のターゲットとする事業の契機となったことに加え、多くのアフリカの女性に関する農業研究を誘引した [Bay (ed) 1982 ; Bryceson (ed) 1995]。

1970年代から1980年代は、欧米でフェミニスト人類学が興隆していた時期でもあった。フェミニスト人類学は、それまでの研究が男性の活動や関心を中心に据えるものであった反省から、女性の視点を付け加える必要性を強調してきたのである [Rosaldo & Lamphere (eds) 1974]。しかし、これらの研究は、文化—自然、公的—私的、男性—女性という二項対立を前提として

つ、女性を劣位に置くという欧米フェミニストの視点を普遍化するものだとして、「第3世界」のフェミニストから後に批判を受けることとなった。中でもインド出身のフェミニスト理論家モハンティは、欧米のフェミニストは本来多様な「第3世界の女性」を男性からの暴力、植民地化、宗教規範などの「犠牲者」として対象化することで、自己（欧米）の優位性を確認していると非難するとともに [Mohanty 1991b]、女性は性別のみを理由に「女になる」(becomes a woman) のではなく、階層、人種、セクシュアリティ、国家などのネットワークシステムが交わることにより、女性という立場に置かれるのだと説明した [Mohanty 1991a : 12-3] 4)。

このような欧米フェミニズム研究へのモハンティの批判は、アフリカン・フェミニストにも共通するところがある。次章で紹介するように、アフリカン・フェミニズムは、1980年代から1990年代にかけて欧米のジェンダー概念との対比を通じ、アフリカならではの女性の立場や男女関係の提示を試みてきたのである。

### 3 アフリカン・フェミニズム

#### 3-1 欧米フェミニズム批判としてのアフリカン・フェミニズム

アフリカでは、1980年代以降、ナイジェリア人の研究者を中心として、欧米のフェミニストはジェンダーの視点をを用いることでアフリカの女性を後進的な「他者」として扱ってきたという批判が強まった。中でも社会学者のアマディウムとオエウミは、その代表格である。

アマディウムは、欧米のフェミニストはジェンダー（社会的性）という概念をセックス（生物学的性）と区別して用いているが、ジェンダーという概念自体が男女の身体的差異（セックス）に縛られていると批判しつつ、イボ社会を事例に女性として生まれながらも社会的には男性としての役割を果たす女性たちの姿を提示し、男女の区分の普遍性に疑問を呈した [Amadiume 2015 (1987)]。これに続き、オエウミは、本来多様な女性達を「女性」として同一化することの危険性を説きつつ、植民地化される前のヨルバ社会で社会制度を規定していたのは年齢や階層であり、ジェンダーではなかったことを明らかにしている [Oyèwùmí 1997]。

その他にも、アフリカン・フェミニストらは「妻」としての女性ではなく、「母親」としての女性の政治的立場の強さを主張する議論 [Amadiume 1997 ; Oyèwùmí 2000]、アフリカの女性の中でもエリート女性に着目する研究 [Musisi 1991 ; Kaplan 1997]、アフリカの女性は出産志向や安定した生活の確保に向けた経済志向を持ち、それらが両立しているという議論 [Mikell (ed) 1997] などを通じ、欧米フェミニズムとの差異を強調してきた。さらに、欧米のフェミニストが男性への政治的対立を主張するのに対し、アフリカン・フェミニズムは女性と男性の協力を求めているなど、欧米のジェンダーとの対比も議論された [Gaidzanwa 1982 ; Steady 1987]。

このようにアフリカン・フェミニズムは、欧米のフェミニズムへの対抗を軸としてそのアイデンティティを構築してきたきらいがあるとの指摘もある。たとえば、ナエメカはアフリカン・フェミニズムの傾向として、(1)ラディカル・フェミニズムへの対抗、(2)母なるもの (Motherhood)

の擁護、(3) 欧米フェミニズムにおける「挑戦、破壊、脱構築、解体」などの用語に対する「協力、交渉、妥協」などの用語の使用、(4) 欧米フェミニズムがセクシュアリティを過度に強調することへの対抗、(5) 欧米フェミニズムでは階級、人種、性的指向などが優先的に扱われるのに対し、日常生活において基本的な問題が交錯しているアフリカの女性にとりそれらの優先順位が低いこと、(6) 女性の問題から男性を排除することへの抵抗、(7) 欧米発の概念の普遍化への対抗があると纏めている [Nnaemeka 2005 : 32]。

その他の論者からも、植民地化以前の女性の立場を理想化し、伝統を鼓舞することの危険性 [Imam 1997] や男女の協力を強調するなどしてジェンダーの相補性 (gender complementarity) を説くことで男女の不均衡が覆い隠されてしまう危険性を述べる議論 [Nnaemeka 1998]、さらには欧米フェミニストとてひとまとめにすることはできないなどの指摘 [Cornwall 2005] がなされており、欧米フェミニズムに対抗することで自分達のアイデンティティを作るのではなく、アフリカの文脈に即したフェミニズムを作り上げていく必要があると喚起する。

### 3-2 欧米フェミニズム批判を超えて：セクシュアリティ研究<sup>5)</sup>の興隆

2000年代に入ると、アフリカン・フェミニズム研究は欧米批判にとどまらない研究を多く生み出し始めた [大池 2013 : 32-5]。その契機となったのが1994年のカイロでの国際人口開発会議であり、ここで初めて「性の権利」(sexual rights) という言葉が使用され、セクシュアリティが人権問題として再定義され、市民活動も活発になる中で、アフリカン・フェミニストらはセクシュアリティ研究に着手していった [Tamale 2011 : 23]。このジェンダーからセクシュアリティへのシフトとも取れる動きは、アフリカン・フェミニズム研究内外に広く影響をもたらしてきた。

先ず、ケープタウン大学のアフリカ・ジェンダー研究所が発行する *Feminist Africa* や南アフリカのフェミニズム出版社が発行する *Agenda* でセクシュアリティに関する特集が組まれるに至った [大池 2013 : 35-6]。また、2011年にウガンダ人のフェミニスト社会学者であるタマレが、アフリカからのセクシュアリティ研究の発信を目的として *African Sexualities* [Tamale (ed) 2011] という論集を刊行した。その中で、彼女は1990年代以前のアフリカの性愛をめぐる研究は生殖や性的暴力の議論に収束し、快楽 (pleasure)、エロス (eroticism)、欲望 (desire) などのアフリカの性愛のポジティブな側面が見過ごされてきたと批判的に述べている。他方、2000年代以降は、快楽、エロス、欲望に着目した研究がなされているとし、アフリカの女性のエージェンシーや快楽を扱う先駆的研究として、デンマーク人のフェミニスト社会学者であるアンフレッドによる *Re-thinking Sexualities in Africa* [Arnfred (ed) 2004] という論集<sup>6)</sup>を紹介している [Tamale 2011 : 22-3]。

この流れに沿う形で、HIV/AIDSの文脈を超え、快楽や欲望の側面を含めたセクシュアリティに着目する研究 [Baylies and Bujra (eds) 2000 ; Manuel 2008]、エロスを扱う研究 [McFadden

2003 ; Tamale 2005]、女性同士の性的関係や結婚を扱うレズビアン研究 [Morgan and Wieringa (eds) 2005]、セックス・ワーカーの雇用環境の詳細を明るみに出す研究 [Gould and Fick 2008] などが産み出されてきている。

加えて、このようなセクシュアリティへの再注目も、アフリカ史研究にも影響をもたらしてきた。アフリカ史学者の富永によれば、歴史研究においてセクシュアリティが再注目されると共に、『ジェンダー』や『フェミニズム』とは距離を置き、まさに his-story の潮流を代表してきた *The Journal of African History (JAH)* が 2014 年に『ジェンダーとセクシュアリティ』と題するフォーラムを特集した [富永 2017 : 87]。そこには、現代アフリカにおけるホモフォビアの起源をサハラ縦断交易におけるアラブ人とアフリカ人との交流の歴史から検討する論考 [Gaudio 2014] やアフリカ研究において情動的なもの (affective) と知的なもの (intellectual) を結びつける必要性を喚起する論考 [Hunt 2014] が含まれており、歴史学や人類学 (あるいは歴史人類学) をはじめとする学際的研究の更なる発展が希求されている。その他にも、アフリカ史研究では、男性性 (Masculinities) の分析 [Lindsay and Miescher (eds) 2003]、女性の身体の政治性に取り組む研究 [Thomas 2003] などが報告されており、アフリカのセクシュアリティ研究は学問領域を横断しながら着々と厚みを増していると言えよう。タマレの論集刊行以降も、アフリカのセクシュアリティ研究は具体的事例を積み重ね、複数形のアフリカン・セクシュアリティーズ (African Sexualities) として再構築されつつある。

しかし、フェミニズム研究に限定して言えば、その視座がジェンダーからセクシュアリティに移行したとしても、前節で見たような女性の立場の理想化 [Imam 1997] やジェンダーの相補性を説くことで男女の不均衡が覆い隠されてしまう危険性 [Nnaemeka 1998] などの限界を乗り越えることはできていないように思える。セクシュアリティという側面から女性の立場やエージェンシーが強調されることにより、一層アフリカの女性の立場やジェンダーの二元性が当然視されているという問題点も指摘できよう。

こうした限界を乗り越える上で着目すべき研究の潮流として、筆者は愛 (love) や情動 (affect) に着目する研究を挙げたい。次章では、これらの研究群の論点を通して、ジェンダー／セクシュアリティ研究にどのような展開を期待できるか考察する。

#### 4 愛 (love) と情動 (affect) への着目の可能性

1990 年代以降、欧米社会を中心にパートナーとの親密性 (intimacy) や愛に着目する愛の人類学 (anthropology of love) に注目が集まっている [Mody 2022]。アフリカにおいては未だ研究蓄積は浅いが、2000 年代以降の情動<sup>7)</sup>をテーマとする研究の拡大 [Hunt 2014 : 335-8] と並行する形で、愛に着目する研究も徐々に増えつつある。

アフリカで代表的な著作に『アフリカにおける愛』 (*Love in Africa*) という論集がある [Cole and Thomas (eds) 2009]。この論集はアフリカにおける親密な関係性 (intimate relations) を性行

為のみに留めてきた社会科学・歴史学を問題視しつつ、愛を真正面から分析対象にすることを目的としている。それは、性行動と情動的関係 (affective relations) の交錯に着目する HIV/AIDS 研究に取り組むことや、グローバル化が進む現代において人びとが求める親密な関係性を検討する研究 [Hirsch and Wardlow (eds) 2006 ; Padilla, Hirsch, Munoz-Laboy, Sember, & Parker (eds) 2007] と足並みをそろえつつ、グローバル化以前の前世紀を含むより長期的な視点から親密な関係性を分析することを意味する [Thomas and Cole 2009 : 3-5]。

この論集において、アメリカ人の人類学者であるコールがマダガスカルの事例から、愛と経済的交換が古くから密接に絡み合ってきたと述べているのは興味深い。コールは、英語における *love* がキリスト教的考えのもとで愛と経済的交換を明確に区別するのに対し、マダガスカル語で *love* に相当する *fatiavina* は、先祖・子孫、親子、夫婦などの関係性におけるケアや互酬性を通じ、愛と経済的交換が相互に構成されている (mutually constitutive) 概念であることを明らかにしている [Cole 2009 : 113-7] <sup>8)</sup>。このように愛と経済的交換の相互構成性に着目する研究は、男女の関係性を性行為のみに留める研究や、経済的な利害を持って男性と親密な関係性を築く女性のエージェンシーを強調することで、不本意にも「金銭目的に男性を使う」アフリカ女性像を強化しているとされる研究<sup>9)</sup>の限界を乗り越え、より複雑なパートナーシップの姿を明らかにしている。

その他にも、アフリカ各地で愛を検討するものとして、同論集に新聞や雑誌の相談コーナーを分析する研究 [Thomas 2009 ; Mutongi 2009] が含まれているほか、2015年にはインディアナ大学が発行する *Africa Today* において「イスラーム・アフリカにおける愛とセックス」に関する特集が組まれた。そこでは、植民地下の裁判事例から表には出てこないエリート女性の愛を読み解く研究 [McMahon 2015] やホモセクシュアリティを扱う映画が視聴者の愛やセックスをめぐる理解にもたらした影響を考察する研究 [Böhme 2015] などが報告されている。さらには、間主観的視点を持つ情動概念を用いながら愛を分析するものとして、レズビアンという枠に囚われない女性同士の親密な関係性を描くクイア研究 [Dankwa 2021] や庭師が植物に抱く愛情に着目する研究 [Archambault 2016] なども報告されており、セクシュアリティ研究における新しい分析対象や視点が提供されている。

愛を主題とする研究において、情動という分析概念を用いて親密な関係性に着目することで、アフリカの女性の立場の理想化やジェンダーの相補性を説くことで男女の不均衡が覆い隠されてしまう危険性、さらにはジェンダーの二元性といった限界を乗り越え、関係性の多面的側面を明らかにしていると考えられる。逆に、アフリカのジェンダー／セクシュアリティ研究から、情動研究に新たな知見をもたらさうとも評価できよう。

## 5 おわりに

本稿は文化人類学、社会学、歴史学をはじめとする人文社会科学において、どのようにアフ

リカのジェンダー／セクシュアリティが語られてきたかを整理することで、記述の方向性を模索する試みであった。

1930年代の西洋の女性人類学者によるアフリカの女性への関心の高まりに始まり、アフリカのジェンダー／セクシュアリティは約1世紀に渡り議論を積み重ねてきた。そして、本稿でみてきたように、1980年代から1990年代にかけて、アフリカン・フェミニストたちは欧米フェミニストによるジェンダー概念の普遍化を批判する形でアフリカの文脈からジェンダーを再考しつつ、アフリカにおける階層や年齢の重要性、「母親」の政治的立場の強さ、アフリカの女性の出産志向、経済志向などを明らかにしてきた。

他方、1990年後半に入ると、欧米フェミニストに対抗することで自分達のアイデンティティを作るのではなく、アフリカの文脈に即したフェミニズムを構築することが喚起されるようになった。この動きは、HIV／AIDSの流行や国際情勢の変化を受けたセクシュアリティへの再注目と相まって、1990年以降ジェンダーからセクシュアリティへのシフトが起きてきた。中でも、快楽、エロス、欲望などのアフリカの性のポジティブな側面を含めつつ、女性のエージェンシーに着目する研究が積み重ねられてきた。また、それまで語られることが少なかったレズビアンの研究や、男性性をテーマに据える研究なども出てきており、個別具体性が重視されるようになっていく。

この傾向は、昨今の愛や情動をめぐる研究の進展を受け、より面白い展開を見せている。これらの研究は、愛と経済的交換の相互構成性、レズビアンという枠に捉われない女性同士の関係性、人間と植物の関係性などに着目することで、セクシュアリティ研究における新しい分析対象や視点を提供するとともに、関係性の多面的側面を明らかにしてきた。また、その場その場で異なる感情や身体的経験などを記述に含めることが可能となっていることから、フィールドでの日常を多彩なままに記述するのに有効だと考えられる。アフリカにおけるより一層の研究の蓄積が期待される。

## <注>

- 1) 筆者は2019年から博士論文執筆のためにモザンビーク北部の農村に通っている。また、2020年から2023年まで在アンゴラ日本国大使館で専門調査員をしていた。
- 2) 本稿では、アフリカと欧米における議論を中心に海外の研究動向を扱う。2000年代前半までの日本の文献を含む動向については杉山〔2007〕に詳しい。
- 3) 本来多様なアフリカ諸国の女性達を「アフリカの女性」としてまとめるには無理があるが、本稿では、欧米の女性研究者により同一化されてきた *African women* とそれに対抗する中でアフリカン・フェミニストらが多様性を加味しつつ再構築してきた *African women* の両方を意味する用語として、便宜的に「アフリカの女性」を用いることとする。

- 4) モハンティは、ボズラップをはじめとする「女性と開発（WID）」関連の研究に関しても、多様な「第3世界の女性」を一つのグループとしてまとめ、普遍的な女性を開発に組み込むことを単純な解決策としているとして問題視した [Mohanty 1991b : 63-6]。その他の開発学におけるアフリカのジェンダー／セクシュアリティの研究動向は友松 [2019] を参照。
- 5) 本稿では、フェミニストによる研究であるか否かに拘らず、2000年代に入ってからのアフリカにおけるセクシュアリティの再注目を契機として蓄積されてきた研究をセクシュアリティ研究と呼ぶ。ここには後に言及する歴史学の研究も含まれている。
- 6) この論集は、(1) 欧米フェミニストによるアフリカのジェンダー／セクシュアリティ研究の脱構築、(2) 男女の性的快楽と欲望に関する実証研究、(3) 女性のエージェンシーに着目する研究の3つのパートから構成されている。(2)には、男子学生の性的経験に関するエッセイを題材とする事例研究 [Ratele 2004] やアフリカにおける複数の社会における女性器の表象から女性のセクシュアリティを考察する事例研究 [Machera 2004] が、(3)には単身女性やシングルマザーのエージェンシーに着目する事例研究 [Haram 2004] 等が含まれている。
- 7) 情動に着目する研究は情動理論 (affect theory) や情動論的転回 (affective turn) として理論化されてきた。国内でいち早く情動に着目した人類学者の西井は、その著作『情動のエスノグラフィ』の序章で、スピノザやドゥルーズといった哲学者の議論を踏まえつつ、情動概念について「意識や主体を越えて、共有する身体が互いに触発しあうことで、新たな活動の力を生み出していくエネルギーのようなものであると考える」と述べている [西井 2013 : 13]。
- 8) ただし、愛と経済的交換の相互構成性はアフリカに特有の傾向ではなく、他地域でも同様に報告されている。たとえば、感情社会学者であるイルズは、それを近代の全体的傾向として捉え「冷たい親密性」 (Cold Intimacies) と呼んでいる [Illouz 2007]。
- 9) コールは、このような研究の一例として、先述したアンフレッドのセクシュアリティに関する論集に加え [Arnfred 2004] 以下の研究を挙げている [Dinan 1983 ; Ashforth 1999 ; Hunter 2002 ; Leclerc-Madlala 2003 : Haram 2004] [Cole 2009 : 111]。

## <引用文献>

- 大池真知子 2013 『エイズと文学——アフリカの女たちが書く性、愛、死』世界思想社。
- 杉山祐子 2007 「アフリカ地域研究における生業とジェンダー——中南部アフリカを中心に」宇田川妙子・中谷文美編『ジェンダー人類学を読む』世界思想社 pp. 144-69.
- 富永智津子 2017 「ジェンダー史／女性史の新潮流——サハラ以南アフリカの事例」『ジェンダー史学』13: 79-90.
- 友松夕香 2019 『サバンナのジェンダー——西アフリカ農村経済の民族誌』明石書店。
- 西井涼子 2013 『情動のエスノグラフィ——南タイの村で感じる・つながる・生きる』京都大学学術出版会。



- Amadiume, I. 1997. *Reinventing Africa: Matriarchy, Religion and Culture*. Zed Books.
- Amadiume, I. 2015(1987). *Male Daughters, Female Husbands: Gender and Sex in an African Society*. Zed Books.
- Archambault, J. S. 2016. Taking Love Seriously in Human-Plant Relations in Mozambique: Toward an Anthropology of Affective Encounters. *Cultural Anthropology* 31(2): 244–71.
- Arnfred, S. (ed) 2004. *Re-thinking Sexualities in Africa*. Nordic Africa Institute.
- Ashforth, A. 1999. Weighing Manhood in Soweto. *Codesria Bulletin* 3-4: 51–8.
- Bay, E. G. (ed) 1982. *Women and Work in Africa*. Westview Press.
- Baylies, C. & J. Bujra (eds) 2000. *AIDS, Sexuality and Gender in Africa: Collective Strategies and Struggles in Tanzania and Zambia*. Routledge.
- Böhme, C. 2015. Showing the Unshowable: The Negotiation of Homosexuality through Video Films in Tanzania. *Africa Today* 61(4): 63-82.
- Boserup, E. 2011(1970). *Women's Role in Economic Development*. Earthscan.
- Bryceson, D. (ed) 1995. *Women Wielding the Hoe: Lessons from Rural Africa for Feminist Theory and Development Practice*. Routledge.
- Cole, J. 2009. Love, Money, and Economics of Intimacy in Tamatave, Madagascar. In J. Cole & L. Thomas (eds) *Love in Africa*, pp. 109-34. University of Chicago Press.
- Cole, J. & L. Thomas. (eds) 2009. *Love in Africa*. University of Chicago Press.
- Cornwall, A. 2005. Introduction: Perspectives on Gender in Africa. In A. Cornwall (ed) *Readings in Gender in Africa*, pp. 1-19. James Currey.
- Dankwa, S. O. 2021. *Knowing Women: Same-Sex Intimacy, Gender, and Identity in Postcolonial Ghana*. Cambridge University Press.
- Dinan, C. 1983. Sugar Daddies and Gold-Diggers: The White-Collar Single Women in Accra. In C. Opong (ed) *Female and Male in West Africa*, pp. 344–66. George Allen & Unwin.
- Gaidzanwa, R. 1982. Bourgeois Theories of Gender and Feminism and their Short-comings with Reference to Sothern African Countries. In R. Meena (ed) *Gender in Southern Africa: Conceptual and Theoretical Issues*, pp. 92-125. SAPES.
- Gaudio, R. 2014. Trans-Saharan Trade: The Routes of “African Sexuality”. *Journal of African History* 55(3): 317-30.
- Gould, C. & N. Fick 2008. *Selling Sex in Cape Town: Sex Work and Human Trafficking in a South African City*. Institute for Security Studies.
- Haram, L. 2004. “Prostitutes” or Modern Women? Negotiating Respectability in Northern Tanzania. In S. Arnfred (ed) *Re-thinking Sexualities in Africa*, pp. 211–29. Nordic Africa Institute.
- Hirsch, J. S. & H. Wardlow. (eds) 2006. *Modern Loves: The Anthropology of Romantic Courtship and Compassionate Marriage*. University of Michigan Press.

- Hunt, N. 2014. The Affective, the Intellectual, and Gender History. *Journal of African History* 55(3): 331-45.
- Hunter, M. 2002. The Materiality of Everyday Sex: Thinking beyond “Prostitution.” *African Studies* 61(1): 99–120.
- Illouz, E. 2007. *Cold Intimacies: The Making of Emotional Capitalism*. Polity.
- Imam, A. 1997. Engendering African Social Sciences: An Introductory Essay. In A. Imam, A. Mama & F. Sow (eds) *Engendering African Social Sciences*, pp. 1-30. Codesria.
- Kaplan, F. E. S. 1997. Introduction. In F. E. S. Kaplan (ed) *Queens, Queen Mothers, Priestesses, and Power: Case Studies in African Gender*, pp. xxix-xxxix. New York Academy of Sciences.
- Leclerc-Madlala, S. 2003. Transactional Sex and the Pursuit of Modernity. *Social Dynamics* 29(2): 213–33.
- Lindsay, L. & S. F. Miescher (eds) 2003. *Men and Masculinities in Modern Africa*. Heinemann.
- Machera, M. 2004. Opening a Can of Worms: A Debate on Female Sexuality in the Lecture Theatre. In S. Arfred (ed) *Re-thinking Sexualities in Africa*, pp. 157–70. Nordic Africa Institute.
- Manuel, S. 2008. *Love and Desire: Concepts, Narratives and Practices of sex Amongst Youths in Maputo City*. Codesria.
- McFadden, P. 2003. Sexual Pleasure as Feminist Choice. *Feminist Africa* 2: 50-60.
- McMahon, E. 2015. “Marrying beneath Herself”: Women, Affect, and Power in Colonial Zanzibar. *Africa Today* 61(4): 27-40.
- Mikell, G. (ed) 1997. *African Feminism: The Politics of Survival in Sub-Saharan Africa*, University of Pennsylvania Press.
- Mody, P. 2022. Intimacy and the Politics of Love. *Annual Review of Anthropology* 51: 271-88.
- Mohanty, C. T. 1991a. Introduction Cartographies of Struggle: Third World Women and the Politics of Feminism. In C. T. Mohanty, A. Russo & L. Torres (eds) *Third World Women and the Politics of Feminism*, pp. 1-47. Indiana University Press.
- Mohanty, C. T. 1991b. Under Western Eyes: Feminist Scholarship and Colonial Discourses. In C. T. Mohanty, A. Russo & L. Torres (eds) *Third World Women and the Politics of Feminism*, pp.51-80. Indiana University Press.
- Morgan, R. & S. Wieringa (eds) 2005. *Tommy Boys, Lesbian Men and Ancestral Wives: Female Same-sex Practices in Africa*. Jacana.
- Musisi, N. B. 1991. Women, “Elite Polygyny” and Buganda State Formation, *Signs* 16(4): 757-86.
- Mutongi, K. 2009. “Dear Dolly’s” Advice: Representations of Youth, Courtship, and Sexualities in Africa, 1960-1980. In J. Cole and L. Thomas (eds) *Love in Africa*, pp. 83-108. University of Chicago Press.
- Nnaemeka, O. 1998. Introduction: Reading the Rainbow. In O. Nnaemeka (ed) *Sisterhood, Feminism and Power in Africa to the Diaspora*, pp. 1-35. Africa World Press.
- Nnaemeka, O. 2005. Mapping African Feminisms. In A. Cornwall (ed) *Readings in Gender in Africa*, pp. 31-41. James Currey.
- Oyèwùmí, O. 1997. *The Invention of Women: Making an African Sense of Western Gender Discourses*. University of

Minnesota Press.

- Oyēwùmí, O. 2000. Family Bonds/Conceptual Binds: African Notes on Feminist Epistemologies, *Signs* 25(4): 1093-8.
- Padilla, M., J. Hirsch, M. Munoz-Laboy, R. Sember, & R. Parker (eds) 2007. *Love and Globalization: Transformations of Intimacy in the Contemporary World*. Vanderbilt University Press.
- Paulme, D. (ed) 2011(1963). *Women of Tropical Africa*. Routledge.
- Ratele, K. 2004. Kinky Politics. In S. Arnfred (ed) *Re-thinking Sexualities in Africa*, pp. 139–54. Nordic Africa Institute.
- Rosaldo, M & L. Lamphere (eds) 1974. *Woman, Culture, and Society*. Stanford University Press.
- Steady, F. C. 1987. African Feminism: A Worldwide Perspective. In R. Terborg-Penn, S. Harley & A.B. Rushing (eds) *Women in Africa and the African Diaspora*, pp. 3-24. Howard University Press.
- Tamale, S. 2005. Eroticism, Sensuality and “Women’s Secrets” among the Baganda: A Critical Analysis. *Feminist Africa* 5: 9-36.
- Tamale, S. (ed) 2011. *African Sexualities: A Reader*. Pambazuka Press.
- Tamale, S. 2011. Researching and Theorizing Sexualities in Africa. In S. Tamale. (ed) 2011. *African Sexualities: A Reader*, pp. 11-36. Pambazuka Press.
- Thomas, L. 2003. *Politics of the Womb: Women, Reproduction, and the State in Kenya*. University of California Press.
- Thomas, L. 2009. Love, Sex, and the Modern Girl in 1930s Southern Africa. In J. Cole and L. Thomas (eds) *Love in Africa*, pp. 31-57. University of Chicago Press.
- Thomas, L. & J. Cole. 2009. Introduction: Thinking through Love in Africa. In J. Cole and L. Thomas (eds) *Love in Africa*, pp. 1-30. University of Chicago Press.

主指導教員（加賀谷真梨准教授）、副指導教員（園田浩司准教授・松井克浩教授）